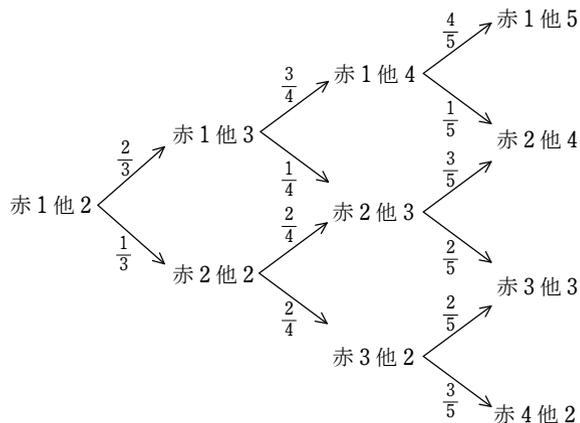


1 ●[理101]N回後に赤m個の確率 $p_N(m)$ (1) $p_3(1):p_3(2):p_3(3):p_3(4)$ [2007 数学 I II A B (理) 101]
袋の中に赤と黄と青の玉が1個ずつ入っている。「この袋から玉を1個取り出して戻し、
出た玉と同じ色の玉を袋の中に1個追加する」という操作をN回繰り返した後、赤の玉
が袋の中にm個ある確率を $p_N(m)$ とする。

- (1) 連比 $p_3(1) : p_3(2) : p_3(3) : p_3(4)$ を求めよ。
(2) 一般のNに対し $p_N(m)$ ($1 \leq m \leq N+1$)を求めよ。

解説

- (1) 操作を3回繰り返したとき、袋の中の玉の個数の推移は、次の図ようになる。



$p_3(m)$ は、操作を3回繰り返した後、袋の中に赤の玉がm個 ($1 \leq m \leq 4$) がある確率であるから、図より

$$p_3(1) = \frac{2}{3} \cdot \frac{3}{4} \cdot \frac{4}{5} = \frac{2 \cdot 4}{4 \cdot 5}$$

$$p_3(2) = \frac{2}{3} \cdot \frac{3}{4} \cdot \frac{1}{5} + \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{3}{5} + \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} \cdot \frac{3}{5} = \frac{2 \cdot 3}{4 \cdot 5}$$

$$p_3(3) = \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{2}{5} + \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} \cdot \frac{2}{5} + \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} \cdot \frac{2}{5} = \frac{2 \cdot 2}{4 \cdot 5}$$

$$p_3(4) = \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} \cdot \frac{3}{5} = \frac{2 \cdot 1}{4 \cdot 5}$$

よって $p_3(1) : p_3(2) : p_3(3) : p_3(4) = 4 : 3 : 2 : 1$

(2)
$$p_N(m) = \frac{2(N-m+2)}{(N+1)(N+2)} \quad (1 \leq m \leq N+1) \quad \dots\dots ①$$

であると推測される。
①が成り立つことを数学的帰納法で証明する。

[1] $N=1$ のとき、①について

$m=1$ のとき 左辺 $= p_1(1) = \frac{2}{3}$, 右辺 $= \frac{2(1-1+2)}{(1+1)(1+2)} = \frac{2}{3}$

$m=2$ のとき 左辺 $= p_1(2) = \frac{1}{3}$, 右辺 $= \frac{2(1-2+2)}{(1+1)(1+2)} = \frac{1}{3}$

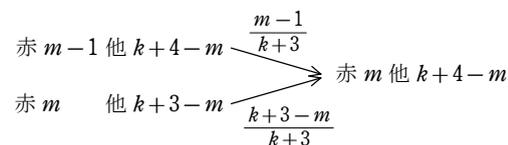
よって、 $N=1$ のとき①は成り立つ。

[2] $N=k$ のとき①が成り立つ、すなわち

$$p_k(m) = \frac{2(k-m+2)}{(k+1)(k+2)} \quad (1 \leq m \leq k+1) \quad \dots\dots ②$$

が成り立つと仮定する。
 $2 \leq m \leq k+1$ を満たす m に対し、 $N=k+1$ のときの確率 $p_{k+1}(m)$ は、②を用いると次のようになる。

$$\begin{aligned} p_{k+1}(m) &= p_k(m-1) \cdot \frac{m-1}{k+3} + p_k(m) \cdot \frac{k+3-m}{k+3} \\ &= \frac{2(k-m+3)}{(k+1)(k+2)} \cdot \frac{m-1}{k+3} + \frac{2(k-m+2)}{(k+1)(k+2)} \cdot \frac{k+3-m}{k+3} \\ &= \frac{2(k-m+3)(k+1)}{(k+1)(k+2)(k+3)} \\ &= \frac{2(k-m+3)}{(k+2)(k+3)} \quad \dots\dots ③ \end{aligned}$$



$m=1, k+2$ の場合、 $p_{k+1}(m)$ は

$$p_{k+1}(1) = p_k(1) \cdot \frac{k+2}{k+3} = \frac{2(k+1)}{(k+1)(k+2)} \cdot \frac{k+2}{k+3} = \frac{2}{k+3}$$

$$p_{k+1}(k+2) = p_k(k+1) \cdot \frac{k+1}{k+3} = \frac{2}{(k+1)(k+2)} \cdot \frac{k+1}{k+3} = \frac{2}{(k+2)(k+3)}$$

よって、③は $m=1, k+2$ の場合も成り立つ。
以上から、①は $N=k+1$ のときも成り立つ。

[1], [2] から、①はすべての自然数Nについて成り立つ。

よって
$$p_N(m) = \frac{2(N-m+2)}{(N+1)(N+2)} \quad (1 \leq m \leq N+1)$$

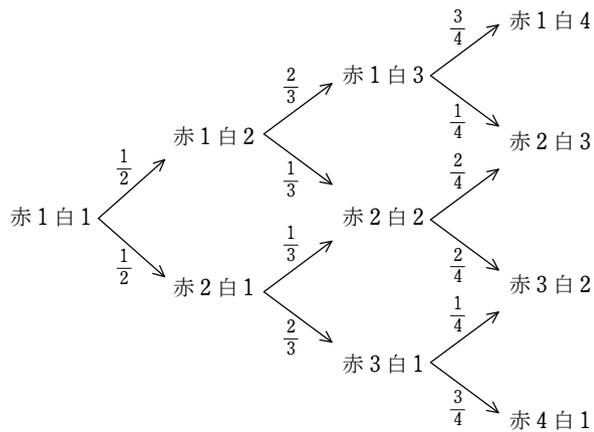
2 ●赤白1個ずつの袋から玉, 同じ色を追加, N回後に赤がm個の確率 [2007]

袋の中に赤と白の玉が1個ずつ入っている。「この袋から玉を1個取り出して戻し, 出た玉と同じ色の玉を袋の中に1個追加する」という操作をN回繰り返した後, 赤の玉が袋の中にm個ある確率を $p_N(m)$ とする。

- (1) $p_3(m)$ を求めよ。 (2) 一般のNに対し $p_N(m)$ を求めよ。

解説

(1) 操作を3回繰り返したとき, 袋の中の玉の個数の推移は, 次の図のようになる。



$p_3(m)$ は, 操作を3回繰り返した後, 袋の中に赤の玉がm個 ($1 \leq m \leq 4$) ある確率であるから, 上の図より

$$p_3(1) = \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{3}{4} = \frac{1}{4}$$

$$p_3(2) = \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{4} + \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} + \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} = \frac{6}{24} = \frac{1}{4}$$

$$p_3(3) = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} + \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{4} + \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{4} = \frac{6}{24} = \frac{1}{4}$$

$$p_3(4) = \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{3}{4} = \frac{1}{4}$$

よって $p_3(m) = \frac{1}{4}$ ($1 \leq m \leq 4$)

(2) $p_N(m) = \frac{1}{N+1}$ ($1 \leq m \leq N+1$) …… ① であると推測される。

① が成り立つことを数学的帰納法で証明する。

[1] $N=1$ のとき, ① について

$$m=1 \text{ のとき } \text{左辺} = p_1(1) = \frac{1}{2}, \text{ 右辺} = \frac{1}{1+1} = \frac{1}{2}$$

$$m=2 \text{ のとき } \text{左辺} = p_1(2) = \frac{1}{2}, \text{ 右辺} = \frac{1}{1+1} = \frac{1}{2}$$

よって, $N=1$ のとき ① は成り立つ。

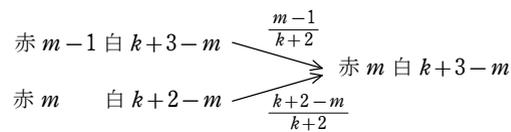
[2] $N=k$ のとき ① が成り立つ, すなわち

$$p_k(m) = \frac{1}{k+1} \quad (1 \leq m \leq k+1) \quad \dots\dots \text{②}$$

が成り立つと仮定する。

$2 \leq m \leq k+1$ を満たす m に対し, $N=k+1$ のときの確率 $p_{k+1}(m)$ は, ② を用いると次のようになる。

$$\begin{aligned} p_{k+1}(m) &= p_k(m-1) \cdot \frac{m-1}{k+2} + p_k(m) \cdot \frac{k+2-m}{k+2} \\ &= \frac{1}{k+1} \cdot \frac{m-1}{k+2} + \frac{1}{k+1} \cdot \frac{k+2-m}{k+2} \\ &= \frac{k+1}{(k+1)(k+2)} = \frac{1}{k+2} \quad \dots\dots \text{③} \end{aligned}$$



$m=1, k+2$ の場合, $p_{k+1}(m)$ は

$$p_{k+1}(1) = p_k(1) \cdot \frac{k+1}{k+2} = \frac{1}{k+1} \cdot \frac{k+1}{k+2} = \frac{1}{k+2}$$

$$p_{k+1}(k+2) = p_k(k+1) \cdot \frac{k+1}{k+2} = \frac{1}{k+1} \cdot \frac{k+1}{k+2} = \frac{1}{k+2}$$

よって, ③ は $m=1, k+2$ の場合も成り立つ。

以上から, ① は $N=k+1$ のときも成り立つ。

[1], [2] から, ① はすべての自然数Nについて成り立つ。

よって $p_N(m) = \frac{1}{N+1}$ ($1 \leq m \leq N+1$)

3 ●[理135]単位円外の点Pからの2接点の midpoint Q の軌跡 [2007 数学 I II A B (理)135]

原点O(0, 0)を中心とする半径1の円に, 円外の点P(x_0, y_0) から2本の接線を引く。

- (1) 2つの接点の midpoint をQ とするとき, 点Qの座標(x_1, y_1)を点Pの座標(x_0, y_0)を用いて表せ。また $OP \cdot OQ = 1$ であることを示せ。
 (2) 点Pが直線 $x+y=2$ 上を動くとき, 点Qの軌跡を求めよ。

解説

(1) 2つの接点をR, Sとする。

$OR=OS, PR=PS$ であるから, $\triangle ORS$ と $\triangle PRS$ はどちらも二等辺三角形である。

よって, 3点O, Q, Pは, この順に一直線上にあり, $OP \perp RS$ である。

$\triangle OPR$ と $\triangle ORQ$ において

$$\angle ORP = \angle OQR = 90^\circ, \angle POR = \angle ROQ$$

であるから $\triangle OPR \sim \triangle ORQ$

よって $OP : OR = OR : OQ$

したがって $OP \cdot OQ = OR^2 = 1^2 = 1$

$$\text{また } \vec{OQ} = \frac{OQ}{OP} \vec{OP} = \frac{OP \cdot OQ}{OP^2} \vec{OP} = \frac{1}{OP^2} \vec{OP} = \frac{1}{x_0^2 + y_0^2} \vec{OP}$$

$$\text{よって } (x_1, y_1) = \left(\frac{x_0}{x_0^2 + y_0^2}, \frac{y_0}{x_0^2 + y_0^2} \right)$$

(2) 点P(x_0, y_0) が直線 $x+y=2$ 上を動くとき $x_0 + y_0 = 2$ …… ①

(1) の結果から $x_0 = (x_0^2 + y_0^2)x_1, y_0 = (x_0^2 + y_0^2)y_1$ …… ②

$$OP \cdot OQ = 1 \text{ すなわち } OP^2 \cdot OQ^2 = 1 \text{ から } (x_0^2 + y_0^2)(x_1^2 + y_1^2) = 1$$

$$x_1^2 + y_1^2 \neq 0 \text{ であるから } x_0^2 + y_0^2 = \frac{1}{x_1^2 + y_1^2}$$

$$\text{これと ② から } x_0 = \frac{x_1}{x_1^2 + y_1^2}, y_0 = \frac{y_1}{x_1^2 + y_1^2} \quad \dots\dots \text{③}$$

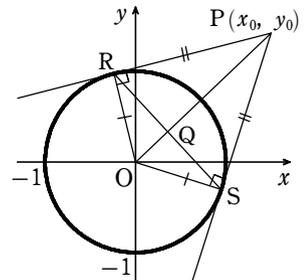
$$\text{①, ③ から } \frac{x_1}{x_1^2 + y_1^2} + \frac{y_1}{x_1^2 + y_1^2} = 2$$

$$x_1^2 - \frac{1}{2}x_1 + y_1^2 - \frac{1}{2}y_1 = 0$$

$$\text{よって } \left(x_1 - \frac{1}{4}\right)^2 + \left(y_1 - \frac{1}{4}\right)^2 = \left(\frac{\sqrt{2}}{4}\right)^2$$

したがって, $x_1^2 + y_1^2 \neq 0$ に注意すると, 点Q(x_1, y_1)の軌跡は, 点 $\left(\frac{1}{4}, \frac{1}{4}\right)$ を中心

とする半径 $\frac{\sqrt{2}}{4}$ の円である。ただし, 原点を除く。



4 ● [理205]3次方程式の解 α, β, γ に対し、 $\gamma - \alpha$ の動く範囲 [2007 数学 I II AB (理) 205]

- 関数 $f(x) = 2x^3 - 3x^2 + 1$ のグラフをかけ。
- 方程式 $f(x) = a$ (a は実数) が相異なる3つの実数解 $\alpha < \beta < \gamma$ をもつとする。
 $l = \gamma - \alpha = \beta$ のみを用いて表せ。
- a が (2) の条件のもとで変化するとき、 l の動く範囲を求めよ。

解説

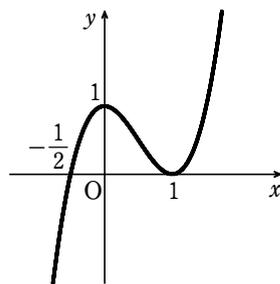
(1) $f(x) = 2x^3 - 3x^2 + 1$ を微分すると

$$f'(x) = 6x^2 - 6x = 6x(x-1)$$

$f'(x) = 0$ とすると $x = 0, 1$

$f(x)$ の増減表は次のようになる。

x	...	0	...	1	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗	極大 1	↘	極小 0	↗



また $f(x) = (x-1)^2(2x+1)$
 よって、 $y = f(x)$ のグラフは、右の図のようになる。

(2) $f(x) = a$ から $2x^3 - 3x^2 + 1 - a = 0$

解と係数の関係から

$$\alpha + \beta + \gamma = \frac{3}{2} \quad \dots\dots ①, \quad \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha = 0 \quad \dots\dots ②$$

① から $\alpha + \gamma = -\beta + \frac{3}{2}$

これを ② に代入すると

$$\gamma\alpha = -\beta(\alpha + \gamma) = -\beta(-\beta + \frac{3}{2}) = \beta^2 - \frac{3}{2}\beta$$

よって $l^2 = (\gamma - \alpha)^2 = (\alpha + \gamma)^2 - 4\alpha\gamma$

$$= (-\beta + \frac{3}{2})^2 - 4(\beta^2 - \frac{3}{2}\beta) = \beta^2 - 3\beta + \frac{9}{4} - 4\beta^2 + 6\beta$$

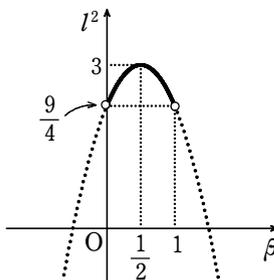
$$= -3\beta^2 + 3\beta + \frac{9}{4}$$

$l = \gamma - \alpha > 0$ であるから $l = \sqrt{-3\beta^2 + 3\beta + \frac{9}{4}}$

(3) $l^2 = -3\beta^2 + 3\beta + \frac{9}{4} = -3(\beta - \frac{1}{2})^2 + 3$

また、 $y = f(x)$ のグラフと直線 $y = a$ の共有点が3個であるように a が変化するとき、(1) の図から $0 < \beta < 1$ である。

よって $\frac{9}{4} < l^2 \leq 3$ ゆえに $\frac{3}{2} < l \leq \sqrt{3}$



5 ○ [文205]2つの放物線C, Dの2本の共通接線とCが囲む面積 [2007 数学 I II AB (文理) 205]

2つの放物線 $C: y = \frac{1}{2}x^2$, $D: y = -(x-a)^2$ を考える。 a は正の実数である。

- C 上の点 $P(t, \frac{1}{2}t^2)$ における C の接線 l を求めよ。
- l がさらに D とも接するとき、 l を C と D の共通接線という。2本の (C と D) の共通接線 l_1, l_2 を求めよ。
- 共通接線 l_1, l_2 と C で囲まれた図形の面積を求めよ。

解説

(1) $y = \frac{1}{2}x^2$ から $y' = x$

よって、点 $P(t, \frac{1}{2}t^2)$ における C の接線 l の方程式は

$$y - \frac{1}{2}t^2 = t(x - t) \quad \text{すなわち} \quad y = tx - \frac{1}{2}t^2 \quad \dots\dots ①$$

(2) ① と $y = -(x-a)^2$ から y を消去すると $tx - \frac{1}{2}t^2 = -(x-a)^2$

整理して $x^2 + (t-2a)x + a^2 - \frac{1}{2}t^2 = 0$

l が放物線 D とも接するとき、この x についての2次方程式の判別式は0であるから

$$(t-2a)^2 - 4(a^2 - \frac{1}{2}t^2) = 0$$

整理すると $3t^2 - 4at = 0$ すなわち $t(3t-4a) = 0$

よって $t = 0, \frac{4}{3}a$

l_1, l_2 の方程式は、 $t = 0, \frac{4}{3}a$ を ① に代入して $y = 0, y = \frac{4}{3}ax - \frac{8}{9}a^2$

(3) 接線 $y = \frac{4}{3}ax - \frac{8}{9}a^2$ と x 軸との交点の x 座標は、

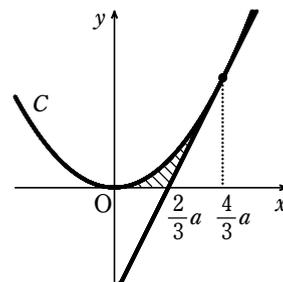
$$\frac{4}{3}ax - \frac{8}{9}a^2 = 0 \text{ を解いて } x = \frac{2}{3}a$$

l_1, l_2 と C で囲まれた図形は右の図の斜線部分であるから、求める面積を S とすると

$$S = \int_0^{\frac{4}{3}a} \frac{1}{2}x^2 dx - \frac{1}{2}(\frac{4}{3}a - \frac{2}{3}a) \cdot \frac{1}{2}(\frac{4}{3}a)^2$$

$$= [\frac{1}{6}x^3]_0^{\frac{4}{3}a} - \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3}a \cdot \frac{8}{9}a^2$$

$$= \frac{32}{81}a^3 - \frac{8}{27}a^3 = \frac{8}{81}a^3$$



6 ● [文230]3直線が△ABCの重心で交わることの証明 [2007 数学 I II AB (文理) 230]

△ABC の辺 AB, BC, CA を 2 : 1 に内分する点をそれぞれ A', B', C' とし、
 △ $A'B'C'$ の辺 $A'B', B'C', C'A'$ を 2 : 1 に内分する点をそれぞれ A'', B'', C'' とする。
 このとき、直線 AA'', BB'', CC'' は △ABC の重心で交わることを証明せよ。

解説

(解1) △ABC の重心を G とする。

$$\overrightarrow{AB} = \vec{b}, \overrightarrow{AC} = \vec{c} \text{ とすると } \overrightarrow{AG} = \frac{\vec{b} + \vec{c}}{3}$$

点 A'' は線分 $A'B'$ を 2 : 1 に内分するから

$$\overrightarrow{AA''} = \frac{\overrightarrow{AA'} + 2\overrightarrow{A'B'}}{2+1}$$

$$= \frac{1}{3}\overrightarrow{AA'} + \frac{2}{3}\overrightarrow{A'B'} = \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{3}\vec{b} + \frac{2}{3} \cdot \frac{\vec{b} + 2\vec{c}}{2+1}$$

$$= \frac{4}{9}(\vec{b} + \vec{c}) = \frac{4}{3} \cdot \frac{\vec{b} + \vec{c}}{3} = \frac{4}{3}\overrightarrow{AG}$$

よって、 G は直線 AA'' 上にある。

始点を B, C にとって同様の議論を行うと、 $\overrightarrow{BB''} = \frac{4}{3}\overrightarrow{BG}, \overrightarrow{CC''} = \frac{4}{3}\overrightarrow{CG}$ となり、 G が

直線 BB'', CC'' 上にあることがいえる。

したがって、直線 AA'', BB'', CC'' は △ABC の重心 G で交わる。

(解2) $A, B, C, A', B', C', A'', B'', C''$ の位置ベクトルを順に $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}, \vec{a}', \vec{b}', \vec{c}', \vec{a}'', \vec{b}'', \vec{c}''$ とすると、

$$\vec{a}' = \frac{\vec{a} + 2\vec{b}}{3}, \vec{b}' = \frac{\vec{b} + 2\vec{c}}{3}, \vec{c}' = \frac{\vec{c} + 2\vec{a}}{3} \text{ であるから}$$

$$\vec{a}'' = \frac{\vec{a}' + 2\vec{b}'}{3} = \frac{\frac{\vec{a} + 2\vec{b}}{3} + 2 \cdot \frac{\vec{b} + 2\vec{c}}{3}}{3}$$

$$= \frac{\vec{a} + 4\vec{b} + 4\vec{c}}{9}$$

同様に $\vec{b}'' = \frac{4\vec{a} + \vec{b} + 4\vec{c}}{9}, \vec{c}'' = \frac{4\vec{a} + 4\vec{b} + \vec{c}}{9}$

直線 AA'', BB'', CC'' 上にある点を、それぞれ $P(\vec{p}), Q(\vec{q}), R(\vec{r})$ とすると、 $\vec{p}, \vec{q}, \vec{r}$ は s, t, u を実数として、次のように表される。

$$\vec{p} = (1-s)\vec{a} + s\vec{a}'' = (1-s)\vec{a} + s \cdot \frac{\vec{a} + 4\vec{b} + 4\vec{c}}{9} = (1 - \frac{8}{9}s)\vec{a} + \frac{4}{9}s\vec{b} + \frac{4}{9}s\vec{c}$$

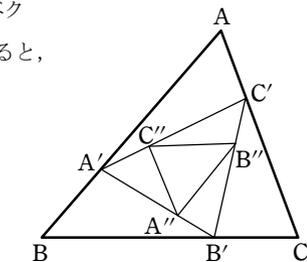
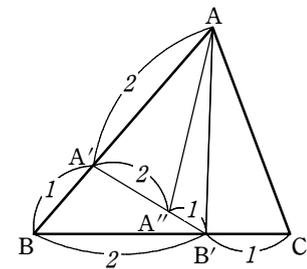
$$\vec{q} = (1-t)\vec{b} + t\vec{b}'' = \frac{4}{9}t\vec{a} + (1 - \frac{8}{9}t)\vec{b} + \frac{4}{9}t\vec{c}$$

$$\vec{r} = (1-u)\vec{c} + u\vec{c}'' = \frac{4}{9}u\vec{a} + \frac{4}{9}u\vec{b} + (1 - \frac{8}{9}u)\vec{c}$$

ここで $s = t = u = \frac{3}{4}$ とすると、 $\vec{p} = \vec{q} = \vec{r} = \frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3}$ となり、これは △ABC の重心

の位置ベクトルである。

よって、直線 AA'', BB'', CC'' は △ABC の重心で交わる。



7 ● [文244] 4次方程式の実数解が等差数列となる係数 [2007 数学 I II A B (文理) 244]
 p を実数とする。方程式 $x^4 + (8 - 2p)x^2 + p = 0$ が相異なる 4 個の実数解をもち、これらの解を小さい順に並べたときそれらは等差数列をなすとする。この p を求めよ。

解説

$x^2 = t$ とおくと、与えられた方程式は

$$t^2 + (8 - 2p)t + p = 0 \quad \dots\dots ①$$

となり、この t についての 2 次方程式が異なる 2 つの正の解をもつことが必要である。その 2 つの解を α, β ($0 < \alpha < \beta$) とすると、 $x^2 = \alpha, \beta$ であるから

$$x = \pm\sqrt{\alpha}, \pm\sqrt{\beta}$$

よって、 $-\sqrt{\beta}, -\sqrt{\alpha}, \sqrt{\alpha}, \sqrt{\beta}$ が等差数列をなすから

$$\sqrt{\beta} - \sqrt{\alpha} = \sqrt{\alpha} - (-\sqrt{\alpha})$$

すなわち $\sqrt{\beta} = 3\sqrt{\alpha}$ ゆえに $\beta = 9\alpha$

したがって、① が 2 つの解 $\alpha, 9\alpha$ をもつ。

解と係数の関係により $\alpha + 9\alpha = 2p - 8 \quad \dots\dots ②, \quad \alpha \cdot 9\alpha = p \quad \dots\dots ③$

② から $p = 5\alpha + 4 \quad \dots\dots ④$

③ に代入して p を消去すると $9\alpha^2 - 5\alpha - 4 = 0$

よって $(\alpha - 1)(9\alpha + 4) = 0$ $\alpha > 0$ であるから $\alpha = 1$

このとき、最初の方程式の解は $x = -3, -1, 1, 3$ となり、等差数列をなすから適する。

求める p の値は、④ に $\alpha = 1$ を代入して $p = 9$

8 ● 2n 個の点に対して n 組の線分が交わらないように引ける証明 [2007]

n を自然数とする。平面上の $2n$ 個の点を 2 個ずつ組にして n 個の組を作り、組となった 2 点を両端とする n 本の線分を作る。このとき、どのような配置の $2n$ 個の点に対しても、 n 本の線分が互いに交わらないような n 個の組を作ることができることを示せ。

解説

(解 1) xy 平面で考える。

$2n$ 個の点に対して、まず x 座標が同じものどうしで組に分ける。

その x 座標を小さい方から x_1, x_2, \dots, x_m ($1 \leq m \leq 2n$) として、 $2n$ 個の点を

$$\{x_1 \text{ の組}\}, \{x_2 \text{ の組}\}, \dots, \{x_m \text{ の組}\}$$

の順に並べ、それぞれの組では y 座標が小さい点から順に左から並べる。

この並べた点を順に P_1, P_2, \dots, P_{2n} とすると、これらを番号の順に結んでできる折れ線は交わらないから、 P_{2i-1} と P_{2i} ($i = 1, 2, \dots, n$) を結ばばよい。

(解 2) 点を釘と考える。 $2n$ 本の点すべてを含むように外側から輪ゴムをかける。

このとき、ゴムに触れている 2 点を順に結ぶと、残りは 0 本または 1 本である。

結んだ線分を除いて同じことを繰り返せばよい。

9 ○ グラフの概形. (1) $y = 1/(x^2 + 1)$ (2) $y = \cos(2\pi/(x^2 + 1))$ [2007]

(1) 関数 $y = \frac{1}{x^2 + 1}$ のグラフの変曲点を求め、グラフの概形をかけ。

(2) 関数 $y = \cos \frac{2\pi}{x^2 + 1}$ のグラフの概形をかけ。

解説

(1) $y = \frac{1}{x^2 + 1}$ から $y' = \frac{-2x}{(x^2 + 1)^2}$

$y' = 0$ とすると $x = 0$

$$y'' = -2 \cdot \frac{(x^2 + 1)^2 - x \cdot 2(x^2 + 1) \cdot 2x}{(x^2 + 1)^4} = \frac{2(3x^2 - 1)}{(x^2 + 1)^3}$$

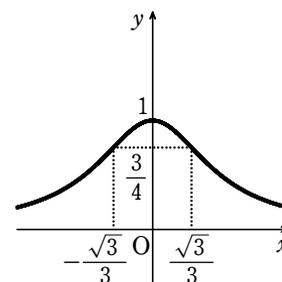
$y'' = 0$ とすると $x = \pm \frac{\sqrt{3}}{3}$

よって、変曲点は $(\pm \frac{\sqrt{3}}{3}, \frac{3}{4})$

また $\lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{1}{x^2 + 1} = \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x^2 + 1} = 0$

したがって、グラフの概形は右の図のようになる。

x	...	$-\frac{\sqrt{3}}{3}$...	0	...	$\frac{\sqrt{3}}{3}$...
y'	+	+	+	0	-	-	-
y''	+	0	-	-	-	0	+
y	↗	$\frac{3}{4}$	↗	1	↘	$\frac{3}{4}$	↘



x	...	-1	...	0	...	1	...
y'	-	0	+	0	-	0	+
y	↘	-1	↗	1	↘	-1	↗

(2) $y = \cos \frac{2\pi}{x^2 + 1}$ から

$$y' = -\left(\sin \frac{2\pi}{x^2 + 1}\right) \times \frac{-4\pi x}{(x^2 + 1)^2}$$

$$= \frac{4\pi x}{(x^2 + 1)^2} \sin \frac{2\pi}{x^2 + 1}$$

$y' = 0$ とすると、(1) より $0 < \frac{2\pi}{x^2 + 1} \leq 2\pi$ であるから

$$\frac{4\pi x}{(x^2 + 1)^2} = 0 \quad \text{または} \quad \frac{2\pi}{x^2 + 1} = \pi, 2\pi$$

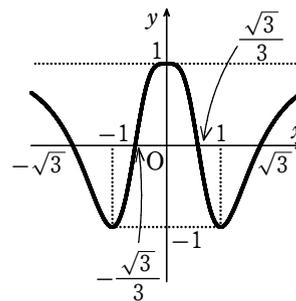
よって $x = -1, 0, 1$

$y = 0$ とすると $\frac{2\pi}{x^2 + 1} = \frac{\pi}{2}, \frac{3}{2}\pi$

よって $x = \pm\sqrt{3}, \pm\frac{\sqrt{3}}{3}$

また $\lim_{x \rightarrow -\infty} \cos \frac{2\pi}{x^2 + 1} = \lim_{x \rightarrow \infty} \cos \frac{2\pi}{x^2 + 1} = 1$

したがって、グラフの概形は右の図のようになる。



10 ● [3C176] 定積分の漸化式で数列を定義. x 軸回転の体積と極限 [2007 数学 III C 176]

数列 $\{a_n\}$ ($a_n > 0$) を次の規則によって定める。

$$a_1 = 1, \int_{a_n}^{a_{n+1}} \frac{dx}{\sqrt[3]{x}} = 1 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

曲線 $y = \frac{1}{\sqrt[3]{x}}$ と、 x 軸および 2 直線 $x = a_n, x = a_{n+1}$ で囲まれた図形を x 軸の周りに

1 回転させた回転体の体積を V_n とする。このとき $\lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n} V_n$ を求めよ。

解説

$$\int_{a_n}^{a_{n+1}} \frac{dx}{\sqrt[3]{x}} = \left[\frac{3}{2} \sqrt[3]{x^2} \right]_{a_n}^{a_{n+1}} = \frac{3}{2} (\sqrt[3]{a_{n+1}^2} - \sqrt[3]{a_n^2})$$

よって、条件から $\sqrt[3]{a_{n+1}^2} - \sqrt[3]{a_n^2} = \frac{2}{3}$ また $\sqrt[3]{a_1^2} = 1$

ゆえに、数列 $\{\sqrt[3]{a_n^2}\}$ は、初項 1、公差 $\frac{2}{3}$ の等差数列であるから

$$\sqrt[3]{a_n^2} = 1 + \frac{2}{3}(n-1) = \frac{1}{3}(2n+1) \quad \text{よって} \quad a_n^2 = \left(\frac{2n+1}{3}\right)^3$$

$a_n > 0$ であるから $a_n = \left(\frac{2n+1}{3}\right)^{\frac{3}{2}}$

また $V_n = \pi \int_{a_n}^{a_{n+1}} \frac{dx}{\sqrt[3]{x^2}} = \pi \left[3 \sqrt[3]{x} \right]_{a_n}^{a_{n+1}} = 3\pi (\sqrt[3]{a_{n+1}} - \sqrt[3]{a_n})$

$$= 3\pi \left(\sqrt{\frac{2n+3}{3}} - \sqrt{\frac{2n+1}{3}} \right) = \sqrt{3} \pi (\sqrt{2n+3} - \sqrt{2n+1})$$

よって $\lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n} V_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n} \cdot \sqrt{3} \pi (\sqrt{2n+3} - \sqrt{2n+1})$

$$= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2\sqrt{3} \sqrt{n} \pi}{\sqrt{2n+3} + \sqrt{2n+1}} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2\sqrt{3} \pi}{\sqrt{2 + \frac{3}{n}} + \sqrt{2 + \frac{1}{n}}}$$

$$= \frac{2\sqrt{3} \pi}{2\sqrt{2}} = \frac{\sqrt{6}}{2} \pi$$

[11] ● [3C195] $A^n = E$ を満たす上三角行列 ($n=2, 3, 4$) [2007 数学Ⅲ C 195]

2行2列の行列 $\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ を考える。 a, b, d が実数で $c=0$ である行列 $\begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix}$ を上三角

行列という。また、 $E = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ とおく。

- $A^2 = E$ を満たす上三角行列 A をすべて求めよ。
- $A^3 = E$ を満たす上三角行列 A をすべて求めよ。
- 上三角行列 A が $A^4 = E$ を満たすとき、 $A^2 = E$ となることを示せ。

解説

上三角行列 A を、 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix}$ とおく。

$$(1) A^2 = \begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a^2 & b(a+d) \\ 0 & d^2 \end{pmatrix}$$

$A^2 = E$ が成り立つための条件は

$$a^2 = 1 \quad \text{①}, \quad b(a+d) = 0 \quad \text{②}, \quad d^2 = 1 \quad \text{③}$$

①, ③ から $(a, d) = (\pm 1, \pm 1)$ (複号任意)

[1] $a+d=0$, すなわち $(a, d) = (1, -1), (-1, 1)$ のとき、

② から、 b は任意の実数。

[2] $a+d \neq 0$, すなわち $(a, d) = (1, 1), (-1, -1)$ のとき、② から $b=0$

よって $A = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 & b \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & b \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ ただし、 b は任意の実数。

$$(2) A^3 = A^2 A = \begin{pmatrix} a^2 & b(a+d) \\ 0 & d^2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ 0 & d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a^3 & b(a^2+ad+d^2) \\ 0 & d^3 \end{pmatrix}$$

$A^3 = E$ が成り立つための条件は

$$a^3 = 1 \quad \text{④}, \quad b(a^2+ad+d^2) = 0 \quad \text{⑤}, \quad d^3 = 1 \quad \text{⑥}$$

a は実数であるから、④ より $a=1$

d は実数であるから、⑥ より $d=1$ ゆえに、⑤ から $b=0$

よって $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$

$$(3) A^4 = A^2 A^2 = \begin{pmatrix} a^2 & b(a+d) \\ 0 & d^2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a^2 & b(a+d) \\ 0 & d^2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a^4 & b(a+d)(a^2+d^2) \\ 0 & d^4 \end{pmatrix}$$

$A^4 = E$ が成り立つための条件は

$$a^4 = 1 \quad \text{⑦}, \quad b(a+d)(a^2+d^2) = 0 \quad \text{⑧}, \quad d^4 = 1 \quad \text{⑨}$$

a は実数で、 $a^2 \geq 0$ であるから、⑦ より $a^2 = 1$

d は実数で、 $d^2 \geq 0$ であるから、⑨ より $d^2 = 1$

$a^2 = 1, d^2 = 1$ を⑧に代入して $b(a+d) = 0$

よって $A^2 = \begin{pmatrix} a^2 & b(a+d) \\ 0 & d^2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} = E$

したがって、上三角行列 A が $A^4 = E$ を満たすとき、 $A^2 = E$ となる。

[12] ● 点列の漸化式. (3) 周期Mで点が一致する行列の存在証明 [2007]

平面上の点の列 $P_n(x_n, y_n)$ ($n=0, 1, \dots$) を次のように定める。

$$\begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x_{n+1} \\ y_{n+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & a \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix}$$

ただし、 t は $0 < t < 2$ を満たす定数とし、 $a = 1 - \frac{t^2}{2}, b = -\frac{t}{2}(2+t), c = \frac{t}{2}(2-t)$ とする。

(1) すべての n に対して、点 P_n が楕円 $x^2 + \frac{2+t}{2-t}y^2 = 1$ 上にあることを示せ。

(2) $t=1$ とするとき、すべての n に対して $P_{n+N} = P_n$ を満たす最小の自然数 N を求めよ。

(3) M を3以上の自然数とする。このとき、すべての n に対して $P_{n+M} = P_n$ が成り立つような t ($0 < t < 2$) が存在することを示せ。

解説

$$(1) \begin{pmatrix} x_{n+1} \\ y_{n+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & a \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax_n + by_n \\ cx_n + ay_n \end{pmatrix} \text{ から } \begin{cases} x_{n+1} = ax_n + by_n \\ y_{n+1} = cx_n + ay_n \end{cases}$$

点 P_n ($n=0, 1, \dots$) が楕円 $x^2 + \frac{2+t}{2-t}y^2 = 1$ 上にあること、すなわち

$$x_n^2 + \frac{2+t}{2-t}y_n^2 = 1 \quad \text{①}$$

$$[1] \quad n=0 \text{ のとき } \quad x_0^2 + \frac{2+t}{2-t}y_0^2 = 1^2 + \frac{2+t}{2-t} \cdot 0 = 1$$

よって、 $n=0$ のとき①は成り立つ。

[2] $n=k$ のとき①が成り立つと仮定する。

$$\begin{aligned} x_{k+1}^2 + \frac{2+t}{2-t}y_{k+1}^2 &= (ax_k + by_k)^2 + \frac{2+t}{2-t}(cx_k + ay_k)^2 \\ &= \left(a^2 + \frac{2+t}{2-t}c^2\right)x_k^2 + \left(2ab + \frac{2+t}{2-t} \cdot 2ac\right)x_ky_k + \left(b^2 + \frac{2+t}{2-t}a^2\right)y_k^2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{ここで } a^2 + \frac{2+t}{2-t}c^2 &= \left(1 - \frac{t^2}{2}\right)^2 + \frac{2+t}{2-t} \left\{ \frac{t}{2}(2-t) \right\}^2 \\ &= 1 - t^2 + \frac{t^4}{4} + \frac{t^2}{4}(4-t^2) = 1 \end{aligned}$$

$$2ab + \frac{2+t}{2-t} \cdot 2ac = 2 \left(1 - \frac{t^2}{2}\right) \left\{ -\frac{t}{2}(2+t) + \frac{2+t}{2-t} \cdot \frac{t}{2}(2-t) \right\} = 0$$

$$\begin{aligned} b^2 + \frac{2+t}{2-t}a^2 &= \left\{ -\frac{t}{2}(2+t) \right\}^2 + \frac{2+t}{2-t} \left(1 - \frac{t^2}{2}\right)^2 \\ &= \frac{2+t}{4(2-t)} \{ t^2(4-t^2) + 4 - 4t^2 + t^4 \} = \frac{2+t}{2-t} \end{aligned}$$

$$\text{よって } x_{k+1}^2 + \frac{2+t}{2-t}y_{k+1}^2 = x_k^2 + \frac{2+t}{2-t}y_k^2 = 1$$

したがって、 $n=k+1$ のときも①は成り立つ。

以上から、 $n=0, 1, 2, \dots$ について①は成り立つから、すべての n に対して、

点 P_n は楕円 $x^2 + \frac{2+t}{2-t}y^2 = 1$ 上にある。

$$(2) \quad t=1 \text{ のとき } \quad \begin{pmatrix} a & b \\ b & c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & -\frac{3}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix} \quad \text{この行列を } A \text{ とする。}$$

$\begin{pmatrix} x_{n+1} \\ y_{n+1} \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix}$ により、 P_n を順に求めると

$$P_0(1, 0), P_1\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right), P_2\left(-\frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right), P_3(-1, 0),$$

$$P_4\left(-\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}\right), P_5\left(\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}\right), P_6(1, 0)$$

よって、 $N=1, 2, 3, 4, 5$ に対しては $P_{0+N} \neq P_0$

また、ハミルトン・ケリーの定理により $A^2 - A + E = O$ (E は単位行列)

両辺に $A + E$ を掛けると $A^3 + E = O$ ゆえに $A^3 = -E$

よって、 $A^6 = (A^3)^2 = (-E)^2 = E$ となるから、 $P_{n+6} = P_n$ が成り立つ。

以上から、求める最小の自然数 N は $N=6$

(3) A が表す1次変換は、 y 軸方向に $\sqrt{\frac{2+t}{2-t}}$ 倍に拡大して、原点を中心に回転移動

し、 y 軸方向に $\sqrt{\frac{2-t}{2+t}}$ 倍に縮小する変換であると考えられる。

そこで、 $B = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & \sqrt{\frac{2+t}{2-t}} \end{pmatrix}$ とおいて、この回転移動を表す行列を求めると

$$\begin{aligned} BAB^{-1} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & \sqrt{\frac{2+t}{2-t}} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 - \frac{t^2}{2} & -\frac{t}{2}(2+t) \\ \frac{t}{2}(2-t) & 1 - \frac{t^2}{2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & \sqrt{\frac{2-t}{2+t}} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 - \frac{t^2}{2} & -\frac{t}{2}\sqrt{2^2-t^2} \\ \frac{t}{2}\sqrt{2^2-t^2} & 1 - \frac{t^2}{2} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$$\text{ここで } t = 2\sin \frac{\pi}{M} \text{ とすると、 } BAB^{-1} = \begin{pmatrix} \cos \frac{2\pi}{M} & -\sin \frac{2\pi}{M} \\ \sin \frac{2\pi}{M} & \cos \frac{2\pi}{M} \end{pmatrix} \text{ となる。}$$

このとき、 M は3以上であるから $0 < \frac{\pi}{M} < \frac{\pi}{2}$ であり、 $0 < t < 2$ を満たす。

$$\text{また、 } A^M = B^{-1} \begin{pmatrix} \cos \frac{2\pi}{M} & -\sin \frac{2\pi}{M} \\ \sin \frac{2\pi}{M} & \cos \frac{2\pi}{M} \end{pmatrix}^M B = B^{-1} E B = E \text{ が成り立つ。}$$

以上から、すべての n に対して $P_{n+M} = P_n$ が成り立つような t ($0 < t < 2$) が存在する。